【 高等学校の部 】　優秀賞

祖母といちご

大分県立大分上野丘高等学校　3年
梶取　ひな子

私と祖母は最近同じ屋根の下で暮らし始めた。それ以前は祖母とは別々に暮らしており、祖母の家は私の家から車で15分の距離だった。距離的には遠い訳ではないのに、私にはそこが異世界かの様に感じられていた。それほど祖母の家は私にとって特別であった。なぜなら、祖母の家には、私の家にはない、自然をふんだんに感じられる庭があったからだ。たくさんの色とりどりの花の香り、それに呼び寄せられた昆虫の生命力、祖母の飼い犬が庭を駆ける音…たくさんの自然を感じた。とにかく心地が良かった。そんな祖母の庭の中でも私が1番大好きだったのは祖母が栽培していたいちごだ。

幼い頃の私は習い事等で忙しく、そこまで頻繁に祖母の家に行っていた訳ではなかった。そのため、私の好物を祖母はそれほど知らないのだが、いちごは唯一祖母が分かる私の好物であった。そんな唯一知っている私の好物を、祖母は庭を耕して栽培してくれていた。

私は、小学生の頃にミニトマトを栽培したことがある。春に苗を植えて水やりをすれば夏に収穫出来るが、私はそんな短期間の水やりですら面倒に感じていた。しかし祖母は「年中ずっと」、春に私がいちごを食べられるように、そのためだけに、…いちごを育ててくれていた。ちなみにいちごは、栽培が難しい作物とよく言われているそうだ。気候変動や病気に弱いため、「年中」管理が必要なのだそう。短期間の水やりで挫折しそうになった私からしたら、いちごを「1年かけて」栽培する祖母は、根気強く、率直に言うと、すごい。自慢の祖母だ。

春に祖母の家に「お久しぶり」と行くと、祖母はいつも「いらっしゃい」と、輝かしい笑顔と共に、採れたてのいちごを私にくれた。早く食べたい気持ちを我慢して、祖母と一緒にいちごを収穫したこともあった。それを祖母の飼い犬が欲しがったりもした。ワクワクしてかじりついた祖母の育てたいちごは、不揃いで、時々虫に食われているものもあれば少し酸味の強いものもあった。しかし、市販のいちごでは味わえない「おばあちゃんのいちご」が私は大好きだった。なんせ、私の大切な祖母が「1年間」大切に育てた、大切ないちごなのだから。太陽の光を浴びてキラキラしていた。自然の味がした。人の「想い」というものはやはり伝わるものなのだろうか。祖母のいちごから、祖母の私を想う気持ちが伝わったような気がした。市販のいちごには感じたことのない、あの頃の何とも言えない喜ばしい感覚は今も忘れられない。

しかし私は今年、祖母のいちごを食べていない。祖母が私の一家と新たな家で共に暮らすこととなり、我々も、祖母も引っ越したからだ。祖母の引っ越しは、大好きだった自然溢れるあの庭に別れを告げることを意味する。更に新居には庭がないため、祖母はいちごを栽培できない。私はそのために今年の春は祖母のいちごを食べられていないのだ。少しだけ寂しい気持ちになった。

しかし、いちごこそなかったが、私は大好きな祖母と共に暮らせるようになった喜びの方が大きかった。更に、家で栽培できないならばと、祖母はこの春スーパーで見つけては、私のために沢山いちごを買ってきてくれた。家に「ただいま」と帰ると、祖母は「おかえり」と、輝かしい笑顔と共に、買ってきたいちごをくれるようになった。そして相変わらず、飼い犬はそれを欲しがる。

人の「想い」というものはやはり伝わるものなのだろう。市販のいちごからでも、祖母の私を想う気持ちが伝わった。今は、祖母が「育てた」いちごではなく、祖母が「買ってきた」いちごが、私にとっての「おばあちゃんのいちご」となり、それが1番の好物だ。私は、とても幸せだ。